

原爆文学研究会報

第十号

原爆文学研究会 二〇〇四年五月

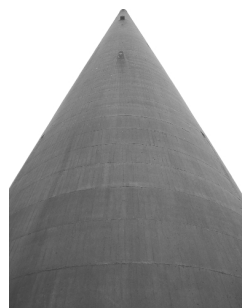
終わりと始まりの場所



第一〇回原爆文学研究会の翌日（二〇〇四年三月二一日）参加者を募り、レンタカーで佐世保周辺を巡った。目的は佐世保戦跡探索。

最初に訪れたのは「特攻殉国の碑」。戦争末期に作られた水上特攻兵器「震洋艇」部隊隊員たちの慰霊碑である。碑は訓練が行われた川棚魚雷艇訓練所跡地の一角に建てられており、振り返ればかつて特攻訓練が繰返した行われた湾内が見える。静かに波打つ、あまりにも穏やかな海が広がっていた。

続いて浦頭引揚げ記念公園へ。大陸や南洋諸島からの引揚げ者が上陸した浦頭検疫所近くの小高い丘の上に引き揚げ者の写真や所持品等が展示されている。人々はそこから七km離れた佐世保引揚援護局（現ハウステンボス）までの道のりを徒歩で移動したのだという。華麗な建物が並ぶハウステンボスの景観とのギャップを改めて痛感。記念公園では不思議ないでたちの女神像が



第一〇回原爆文学研究会報告

海に向かって微笑んでいた。さらに針尾電波塔へ。真珠湾攻撃開始の「ニイタカヤマノボレ」を打電したといわれる三本のコンクリート柱は倒れかかってくるように巨大であった。（中野 和典）

二〇〇四年三月二〇日（土）佐世保工業高等専門学校多目的教室で開催した第一〇回研究会には約二〇名が集いました。

新木氏の研究発表では、「単線的な歴史記述を批判する記述が単線的なものになってしまっているのではないか」等の質問について意見が交わされました。

中原氏は天草の被爆者に注目し熊本県被爆者相談所を訪れた結果報告から、長崎市内の学校の被害状況に話題を展開。資料として示された完全手書きの地図に、数字から光景を立ち上げることによって原爆を考えようとする氏の思いが感じられました。



封じ込められる被爆の記憶

長崎の都市開発と被爆の「記憶の場」

新木 武志

長崎市は、大正期以降、浦上川沿岸一帯を工業地域及び住宅地域として開発を進めていたが、一九四五年八月九日に投下された原爆はこの開発されつつあった浦上地区を壊滅させた。戦後、長崎市は国庫補助を得るために原爆被害を強調し、一九四九年に「国際文化都市」となったが、長崎市による国際文化都市建設事業は、浦上地区の住宅地化を進めるなど大正期から進められてきた長崎市の近代化を推進するものであり、そのなかで浦上の地域共同体は解体され、被爆者は放置されていた。

一九五四年三月にビキニ島での水爆実験による第五福竜丸の被爆によって広島・長崎の原爆被害への関心が高まったが、アメリカの核の傘の下におかれるという状況のなかで長崎の被爆遺構は撤去され、多くの被爆者は差別と貧困のなかで沈黙を続けた。一九八〇年代になり世界各地で反核運動が高まるとともに、長崎市は学校教育のなかに原爆についての学習を取り入れ、被爆体験の継承を進めていくが、長崎の被爆地としてのカリスマ性の喪失が危惧され、現実には被爆体験が切実に受取られないという状況が生まれた。そのなかで、長崎市は被爆した中心地を聖域化していくとともに、日本のアジア・太平洋への侵略・加害の歴史の反省と償いを表明するが、原

爆投下を侵略・加害との関連で公的にディスプレイすることは抑圧し、被爆地ナガサキの聖性を傷つけるような記憶を排除している。

その一方で、長崎市は一九九〇年頃から、長崎「旅」博覧会の開催や「長崎市都市景観条例」の制定、「道路愛称普及事業」、「長崎市伝統的建造物群保存地区保存条例」の制定、「長崎歴史探訪路事業」など、文化遺産や歴史的景観などを利用したまちづくりに取り組んでいる。それとともに、出島や幕末から明治期の居留地跡である南山手と東山手などは長崎の歴史やアイデンティティの拠り所とされているが、そこからは長崎がアジアへの帝国主義的拡大の拠点であったことや被爆の記憶が排除されている。

そのため、現在の長崎において被爆の記憶は、平和公園と八月九日を中心とした時空に封じ込められ、「願い」や「祈り」のモニユメントとして可視化されており、歴史化されることはない。そこでは、なぜ原爆で死ななければならなかったのかという問いや差別や貧困のなかにおかれてきた被爆者の姿が抜け落ち、平和公園一帯は、「核兵器の廃絶と世界平和を祈念する地区」、「時代を超えて平和の尊さを発信する拠点」として非歴史的・超歴史的な聖域とされ、被爆遺構はまちづくりの資産とみなされているのである。

このように、被爆の記憶は政治的・経済的状况や国際関係を反映してさまざまに利用されてきたのであり、そのなかで被爆の記憶の継承のためには、長崎の歴史のなかで周辺化されてきた浦上や被爆者の生活史を組み込んだ長崎史を再構築していくとともに、都市空間のなかに重層的な過去に開かれた「記憶の場」を創り出していくことが求められている。

天草と長崎被爆者

ひとはひとりとして

中原 澄子

熊本県に住む被爆者は二〇九八名。うち手当等受給者数一八二〇名。天草の被爆者五二二名（県の約四割）。受給者四六三名（被団協新聞二〇〇三年七月六日）。全都道府県の被爆者手帳所有者数二七九一七四名（二〇〇三年三月末厚労相）。「徴用」「学徒動員」等による国の強制で広島・長崎で被爆し、どうにか故郷や近郊に帰ることができた人たちである。

原子爆弾によって瞬時に焼死した人、三日後、五日後、一年後、二年後、あるいは人知れずはかなくなった人は以上の数には含まれていない。残る人々もあれから五十九年を経て、未だに健康管理・保健・介護等の費用を受給するために法廷で争っている。

戦争を始めたのは国である。敗戦色あらわな一九四五年。七月二六日にポツダム宣言発表。最高戦争指導者達は国民（国体ではない）への責任をどの程度考えただろうか。本土決戦へ向け、皇居の警固・各方面軍の編成替えをするうちに八月六日を迎えてしまった。この十二日の空白に日・米英・中・ソ各国はどんな動きをしたか、特に米の企図についてもっと知りたいと思っている。

私は今年一月末熊本県被爆者相談所を訪ねた。午前十時から昼までと指定されていたので、前日夕刻、所在地を確かめに行った。

「観光立市「くまもと」都市宣言」なる大きな看板が十四階建て市役所の横に立っていた。「立市」は辞書にない。「被爆者相談所」を市役所にまず聞きに行った。器機で検索するまではよかったが、わからないと言う。日暮れまで探し回った。表通りにシルバーセンタ―とある建物の裏へ回ると、先刻見過ごした開けっぱなしの入口があった。足元の悪い地面、古いコンクリート塀を背に倉庫様の事務所はあった。「熊本県被爆者相談所」の看板があった。「観光立市」とはこういうことなのかと納得し、熊本城と競うような大きな市役所を見上げながら宿に戻った。

定刻に訪れると、筒型の古いストロブの中に当番の三人の役員が慌しく立ち働いていた。深堀弘泰支部長は風邪で青ざめた顔で、夕刻から菊池市に向いて被爆を語る要点をまとめていた。スミソニアン航空宇宙博物館に展示されたB29エノラゲイ展に抗議に行った朝長民子ともみかさんも当番だったが、声をかけるゆとりがなかった。深堀さんに、「長崎で爆死した天草出身の人の数がわかりますか。」「そのようなことはわからない。ほかには。」と聞かれ、被団協の歩みをとようと、黙って「日本被協史」を作ってくださいました。この人は、国鉄長崎管理部所属、長崎行普通列車が長与駅に停車中、橙色に光る空を見、長崎の情報を聞き一号の救援列車を走らせた人だ（長崎市内状況証言集）。群がるすさまじい様相の被爆者を何十人列車に抱え入れたか分からない。と。その間に、母親も家も肉親もなくして。「被爆者健康手帳」を交付されたのが平成四年七月だという。やがて八十歳。次々に役員が亡くなるので役員を引き受けざるを得ない、と言われた。

昼食に誘われたが、辞退し、もう一人の私と同世代の男性が手に

していた「十五歳のナガサキ原爆」その本が欲しいといつと、「紀伊國屋へ案内して」と言われ、礼をして別れた。残念ながら在庫がなかった。翌日小倉で下車して買うことができた。

当時長崎中学生徒だった人の、全長崎市の中学校と女学校の生徒の被爆死について、生徒数幾人中幾人、どこでどのような作業をしている時に亡くなったか、克明に記してあった。私が求めていたのはこのような記録だった。数字が人の姿を想像させるものとして立ち上がった。三菱兵器製所のどの部署で。昼近い炎天下プールに跳び込んで、瞬間火膨れになった小学校の男の子たち。長崎市制六十五年史』の引用が多かったので、せめて、国民学校・高等科の被爆者数だけでもと、小倉中央図書館に通いつめることになった。

彙報

第一〇回 原爆文学研究会

日時 二〇〇四年三月二〇日(土) 一四時より

会場 佐世保工業高等専門学校多目的教室

内容 研究発表

「封じ込められる被爆の記憶」

長崎の都市開発と被爆の「記憶の場」

新木 武志

天草と長崎被爆者 ひとつはひとりとして

中原 澄子

懇親会 (一八時半より)

機関誌「原爆文学研究」第三号原稿募集

本研究会が年に一回発行している「原爆文学研究」第三号の原稿を左記の要領で募集します。この機関誌には「原爆文学」の評論の他、エッセイも掲載することとします。奮ってご投稿下さい。

記

書式 縦書き、三〇字×二四行、一段組。

投稿締切 手書きやプリントアウト原稿での投稿の場合は二〇〇

四年六月中旬、データファイル(Word か一太郎)を

添付しての投稿の場合は六月末日。

発行経費 投稿者は、各自の原稿一頁(機関誌の書式にて)につ

き、一、〇〇〇円を発行経費として負担する。

投稿宛先 原爆文学研究会事務局(住所・連絡先は会報末)。デー

タファイルの場合はプリントアウト原稿を添えて郵送して下さい。

編集後記 スペースの関係で長くことは出来ませんが、「原爆文学研究」第三号へのご投稿よろしくお願いいたします。(N)

発行元 原爆文学研究会事務局

〒811 6520 福岡市中央区六本松4 2 1

九州大学大学院比較社会文化研究院 花田俊典研究室内

tel/fax 092-726-4597 e-mail hanada@rc.kyushu-u.ac.jp

URL <http://www.scs.kyushu-u.ac.jp/~th/genbunken/index.htm>